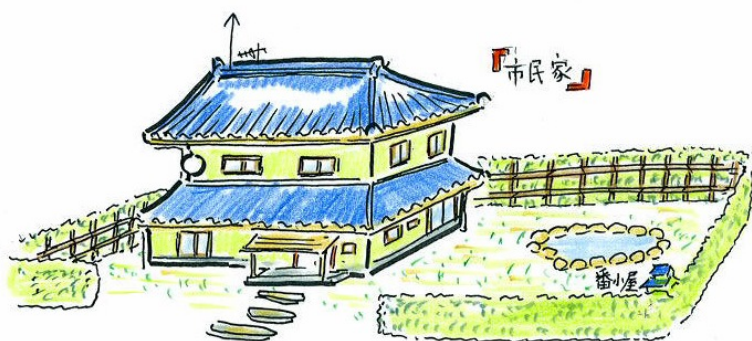


★★ 支援くんの火災予防奮闘記 ★★ これまでのあらすじ

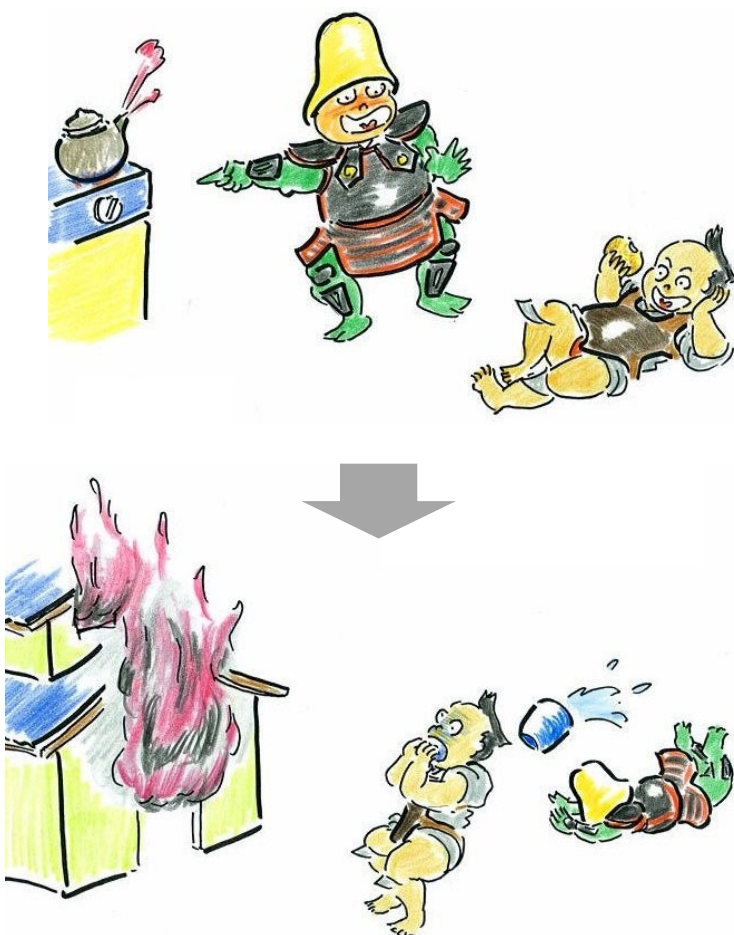
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



家来の^{ちゅうげん}中間 ご助と火災予防の点検を行うのですが、まじめな支援くん比べ、あまり仕事に熱心じゃないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起きてしまいます。



そんなご助に手を焼きながら、火災の予防を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん^{えん}には何故か二人の姿が見えるようになったのです。

点得幼稚園^{てんとく}の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き。

でも、援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。



ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの

火災予防奮闘記 をどうぞご覧ください。

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.49

前号のあらすじ

報恩講（ほんこ）さんのマッコウが何か分からず、知ったかぶりをしてしまったご助は、援姫様の勧めるがままに、仏具で加持祈祷を始めてしまう。しかし異変に気付いたママさんにより、援姫様は百ペンペンの刑に…。

「えんママ様っていうからには、やはり閻魔様より強いんじゃないだろうのお…あははは…」と呑気に笑っておったご助に、急に生暖かい風と背筋の悪寒が襲い、更には仏壇の鶴亀の燭台が頭上へと落下。脳天を打たれ気を失ったご助は三途の渡しにたどり着く。「ま、また来ちまったじゃねえか…」と恐怖で震えるご助の前には、前歯の抜け落ちた大きな口を開け笑う奪衣婆が立って居った。

「ひっ？し、しばらく見ないうちに迫力が増したんじゃないですかい？」と奪衣婆に震える声でご助が言うと

「あー、年だねえインプラントにしたいんだけどさ、先立つものがね。そいで、今回は持ってきなさったかい？」というと、奪衣婆は顎辺りまで挙げた左手の爪の伸びきった親指と人差し指で輪っかを作ると

「お宝お宝、早く出しな。」とご助を急かすのじゃった。



「しょ、しょうがねえなあ、分かってまっすって。あっしも馬鹿じゃねえですから、先に地獄にお邪魔したときに学習しやしたからね。」というとき首にかけた紐を外したのじゃった。紐には50円玉が6枚…6文銭の積もりじゃろう…。

「お婆殿、1文はオヨソ30円、6文で180円じゃが、ここに300円ある。これだけ渡すんだ、賽の河原からこっちへ往復で頼みますぜ。」と話すご助に

「どうゆう理屈か分らんが…」と、手を出す奪衣婆。

ご助はその手に6枚の50円玉を渡そうとしたのじゃが…。

チャリーンと誤って50円玉をバラまいてしまい、また、間の悪いことに3枚がポチャンと、三途の川へ落ちてしまったのじゃった。



「ああッ、あっ、あっしの6文銭が！」ご助は川面を覗き込んだのじゃが、落とした50円玉は見える筈もなく

「ひっひっひっ、悪いことは出来んのう・・・」と、腰に手を当てて笑う奪衣婆に向き直るとご助は奪衣婆の節くれだった膝頭に取りすがり

「お、お婆殿、１５０円、１５０円で何とか・・・こ、こども運賃で往復出来んか？」とちょん髷を大五郎へアーにして見せたのじゃったが



「どこに三途の渡し賃を値切る馬鹿がおる！」と、錢の代わりに容赦なく胴丸と単衣を奪うと、ご助を渡し船に乗せ、対岸へと向かったのじゃった。

「あああ、また閻魔様に叱られ灼熱地獄行きかなあこんなことになるなら、マッコウが何か旦那様にお聞きすりゃ良かったんだ。旦那様あ」いつしかご助の頬には大粒の涙が

対岸の賽の河原が近づくにつれ、かすかに聞こえていた

「一つ積んでは母のため・・・一つ積んでは父のため・・・」との、悲し気な
幼い子供の声が段々と大きくなってきたのじゃった。

「わあああん、嫌だ嫌だ嫌だぁー。地獄には行きたくなぁい、わあああああん、
わああん旦那様ぁっー。」と、泣き叫ぶご助の大粒の涙はご助の体を濡らし、
やがて渡し船の底にも溜まっていったのじゃった。



「わあああん旦那様ぁ、助けて下せえ！チキショー何て冷てえ水なんだッ。怖いよー」と叫ぶご助の肩を ガッ とお婆が！

「つ、着いちまったのか？嫌だっ、あっしは降りやせんぜ。た、頼むうお婆、
あっちへ、もとの岸へ返して呉れ！頼むうう」と叫ぶご助の耳元で
「馬鹿なやっちゃ。こんなでかい寝小便を垂れおって。余程ひどい火遊びした
んじゃろ！」と聞き覚えのある旦那様のお声が・・・。

「だ、旦那様？・・・旦那様ですかい？旦那様も地獄に？」としがみつくご助は
「ば、馬鹿者！き、汚いじゃろ、寝小便でベチャベチャの体でしがみつくな！」
と拙者に叩かれ、ようやく正気に戻ったのじゃった。



寝小便でベチャベチャの布団のうえで正座したご助は

「こ、ここは・・・番小屋でやしょ？・・・それで、これはあっしの布団でやしょ？・・・へ？・・・へへっ・・・へへへへ。やったーけえってきたんだ！じ、じ、地獄からけえって来たんだあ。バンザーイ、バンザーイ、バンザーイツ」
とはしゃぎだしたのじゃった。

万歳のし過ぎで、ご助がむせ込み始めるのを待って拙者は

「万歳三唱しておるところを悪いがの、おのれは仏壇に何をしたのじゃ？」と聞いたのじゃった。

「へっ？ぶつ・・・だん？」と鳩が豆鉄砲を喰らったような目のご助を座敷の仏壇の前に引き出すと

「左様じゃ。おのれはここで仏壇の仏具を取り出して朱蠟燭に火を点け線香を焚き、更に抹香を撒き散らかして何をしておったのじゃ？」と拙者が問い詰めると

「い、いえね、姫様にそそのかされ。その、加持祈禱を・・・」というご助に

「な、なんの為の祈禱じゃ？」と問い詰めると、ご助は

「・・・マ、マッコウでさ。マッコウって代物が何なのか知りたくて・・・へ？

抹香を撒き散らかしたって言ってやしたね旦那様。姫様と一緒に『カーツ』で護摩行のように撒いていたあれがマッコウなんで？」と語りおったのじゃった。



「ほお、やはりおのれは抹香を知らなかったあのじゃな？それであの有様か？」

「な、なんでえ。旦那様はあっしが抹香を知らねえって分かってたんですかい？

人が悪いですぜ。ちょっと教えて下されば奪衣婆に脅され、寝小便・・・うぐ

ぐ・・・」と口をつむぐご助に

「奪衣婆？何のことじゃ？おのれはまた奪衣婆殿に会って来たのか。はは一ん、

あの鶴亀の燭台に頭を割られて地獄へ参っておったのか。ははは、それで、寝

小便しながら旦那様助けしてくれって寝言で泣きわめいておったのじゃな？」と

続ける拙者に

「ち、違えますだよ。あっしは本当に姫様のお相手をして・・・」と言い募る

ご助に

「ご助、おのれはもう少し正直にならんといかんぞ。この世で一番恐ろしいの

はな、^{ばち}罰だぞ罰。それも仏罰ってなると閻魔様のお仕置きも厳しくなるぞ！」

と教えたのじゃったじゃったが



「で、でえ丈夫でさ。あっしは何も仏罰が下るような悪さなんざしてやせんぜっ」

と居直ったご助の背後の襖がガラッと開き、顔中を涙でぐちゃぐちゃにした援
姫様が、

「えんちゃんオネショなんかしてないもん！たしゅけてッ」と駈け込んで来た
のじゃった。

そして、その背後から

「くおーら、待たんかーい。」と 般若のように怒ったえんママ様が追いか
けて来たのじゃった……。ご助にはその顔が三途の渡し守、奪衣婆の顔
に映ったのじゃった。

「ひiiiiiiii？」と、引きつった悲鳴を上げ、ご助は後ずさると撒き散らか
した抹香に足を取られ、ドォッと仏壇の基壇に体を打ち付けおったのじゃった。

「ひいい……。驚かすんじゃねえぜ、全く！」とご助が仰向けになった体を起
こそうとしたその時、ご助がぶつかってからカタン、カタン……。カタンと乾
いた音が鳴り続いておった仏壇の中から、燭台が……。あの鶴亀の燭台がご助の
頭目掛け落ちて来たのじゃった。



さても皆さま、『善人なおもて往生を遂ぐ いわんや悪人をや』の教えを今一度辿って参りましょうかの・・

それと、昔から火遊びすると寝小便する・・・根も葉もないと考えぬようにの。



(おわり)